

7人のキーパーソン

1. アンナ&ローレンス・ハルプリン (Anna & Lawrence Halprin)
2. ハワード・シェクター (Howard Schechter)
3. ジョアンナ・メイシー (Joanna Macy)
4. カール・アンソニー (Carl Anthony)
5. ハンター・ロビンス (Hunter Lovins)
6. ボニー・ニクソン (Bonnie Nixon)
7. ハイ・グエン (Hai Nguyen)

7人のキーパーソン

今回の旅では、企業やNPOだけでなく、様々な形でサステナビリティの分野で活躍する方々との出会いもあった。印象の深かった人物に関して、中野と岡本がそれぞれ別の視点から人となりと印象をまとめてみる。

①

アンナ&ローレンス・ハルプリン (Anna & Lawrence Halprin)

～自然と一体化して暮らす

有名なアーティスト老夫婦～（中野民夫）

パロマが現地でアポイントを取ってくれ、マリン郡サンアンセルモの奥の複雑な山の中の道を辿り、アンナ・ハルプリンのお宅に向かった。

門から山の道を木々の間を下ってスタジオへ。その横には森の中にかなり広いスペースのウッドデッキが作ってある。レッドウッドの巨木に囲まれ、気持ちがいい。そのテラスで寝転んで待っていると、小柄な女性がゆっくり降りて来る。90歳を超えて元気で現役のダンサー、アンナ・ハルプリンだ。

「サステナビリティの話に私がどう貢献できるかしら」と、立ったまま話し始める。周囲の木々など自然と一体になることの大切さと、そのことを自分なりにやってきた、ということを、まさに身体で表現しながら話してくれた。その身振りは実に素敵だった。

オフィスで、「スタイル・ダンス（じっと自然の一部になりきるパフォーマンス）」のパンフレットを見せてくれた。古い木の粉を自分にもまぶして、古木と一体となっている写真など、一瞬見るだけでもドキリとくる。自然との一体感は、東洋のものかと思いきや、実に深いレベルで探求して来た女性が目の前にいることに感激した。そして、いろいろな話をしてくれる。踊りに使うスコアの素敵な図や絵も実際に興味深いものだった。

上の段の家に上がると、足下が弱々しく歩行



器を使い、片目に眼帯をする老人の男性がいる。ランドスケープのデザイナーおよび建築家で、様々な価値観が錯綜する中で都市計画のワークショップを最初に始めたことで有名なローレンス・ハルプリンだ。アンナのパートナーであり、伝説の人で、正直もう亡くなっていたかと思っていたが、お会いできてびっくり。しかも、ワークショップの起源について新しい話も聞けた。私が「ローレンスが都市計画でワークショップを始めたのは、アンナが先にダンスのワークショップをやっていて、彼女にインスピライされて始めた」という話を聞いたことがあります

が、それは本当ですか?」と尋ねた。すると、「インスパイアというのは正しくないな。ずっと一緒にやっているから、お互いに影響し合いながら一緒に始めたんだ」と話してくれた。いい話ではないか。

岡本さんの文章にあるが、彼は日本軍の特攻隊に突っ込まれた一人だそうで、日本や日本人には複雑な思いの日々が長かったらしい。彼の話を熱心に聞いていた岡本さんが、帰り際に、「日本のやったことを本当に申し訳ない」と真摯に謝る姿にも感銘を覚えたが、即座に「その言葉をお返しするよ」と応じたローレンスも素敵だった。確かな民間外交がここで行われていると感じた一瞬だった。

～時を超越し、自然の中に溶け込んでいる 　　ハルプリン夫妻～（岡本享二）

90歳代のご夫妻。ご主人のローレンスはランドスケープ建築家（街や地域全体の環境を考える建築手法）の先駆者。奥さんのアンナは国際的に著名な舞踏家。ご夫妻の活動ぶりは中野民夫の前述に譲るとして、ここでは、ローレンスとの不思議な出会いについてお伝えしたい。

ローレンスが建てたカリフォルニア州オークランドの山腹にあるご夫妻の住居は、随所に舞踏家の奥さんへの配慮が見て取れる。山の傾斜を上手に活用して自然の中に溶け込ませた住居は緑と一体化している。正門（と思っていたら山頂にも別の門があった）を入って木製の階段を上ると、中腹に全て木でできた舞踏ステージが設けてあって、ダンスや瞑想ができるようになっていた。舞踏ステージで寝転がったり、瞑想をして待っているとアンナが山頂の自宅から降りてきた。

手ぶり身振りを交えて「自然とダンスのミックスされたパフォーマンス」について熱心に話してくれる。素っ裸になって草や花をまとい、朽ちた巨木の割れ目に我が身を投じて写真を撮ったパフォーマンスなど等。日本からも著名



な舞踏家が教えを請いに何度も足を運んでいることも知った。

アンナの話が一通り終わると彼女と一緒にさらに階段をのぼって山頂の住居にたどり着いた。そこには独眼の夫、ローレンスが待っていた。寡黙なローレンスは一通りのあいさつを済ませると周りを散歩し、景色を眺めている。その時は建築界の大家とは知らなかったのが、帰国後インターネットで人となりを調べてみると次のように出ていた。

「ランドスケープ・アーキテクトとして活躍し1953年～1977年の間に55もの賞を受賞している巨匠。代表作に、ニコレットモール（アメリカ、ミネソタ州、ミネアポリス）、ポートランドの広場（アメリカ、オレゴン州、ポートランド）、その他にラヴジョイプラザ、ペティグローヴパーク、フォアコートプラザ等。作品の特長としてはシエラ山中、イスラエル、シー・ランチなど、荒々しい自然と接触した体験から、作品の中にその影響がみられる。世界各都市を歩き、芸術としてだけではなく、生きたコミュニティとしてとらえ、各都市を分析研究している。」

そのローレンスとの心の触れ合いは、住居

の近くに建ててあった8畳程の鳥小屋風の犀（Rhinoceros）の小屋から始まった。

犀といつても天井からぶら下がっているビニールでできた人形である。この犀をローレンスが気に入っていることは雰囲気で分かった。そこで私はユーモア精神を發揮して「ローレンス、犀のためにわざわざ小屋を作ったんだね？」と声をかけたら、彼は満面に笑みを浮かべて「オーわかったたってくれたか、友よ。パリで買ったんだ」と言って犀を指さす。

それからの彼はいろいろなことを私に話してくれた。日本人が好きになれなかつたこと。しかしながら奥さんのアンナと夫婦になり、彼女のパフォーマンスを通じて多くの日本人がここへ訪ねてきてくれたお陰で、どうにか日本人とも打ち解けるようになってきたことなど、昔を回顧するように話し始めた。

「ええ～、どうして日本人嫌いだったんですか？」と尋ねると、「Hated KAMIKAZE!!」と語気を荒げていわれ、直ぐには理解できなかつた。文脈を聞き終わってすべてを理解した。「憎つき神風野郎さ」とでも訳すべきだろう。ローレンスは1942年の太平洋戦争の最中に、軍艦に乗船していて、日本の神風特攻決死隊の突撃を受けた。軍艦は沈み、爆撃や溺れて仲間の兵士55人が亡くなり、65人がなんとか生き延びた。彼の親しい戦友や同僚が太平洋の藻屑と消えた。彼が独眼で黒い遮眼帯を常時付けていた理由もわかつた。

それでもこうもいう。「傷痍軍人となってサンフランシスコで療養させてもらったのでアンナとも出会うことができ、この地に住むこともできたんだ」と、遠くを眺めるようにしんみりと話してくれた。

私はどう返していいか躊躇したが「日本人を代表して心からのお悔やみと、戦争当時の苦しみに対して本当に申し訳なかった」と、謝った。ローレンスは、ゆっくりと、しかし、しっかりした口調で「今、お前が言った言葉をそっくり日本人にも伝えてくれ。我々も第二次世界大戦



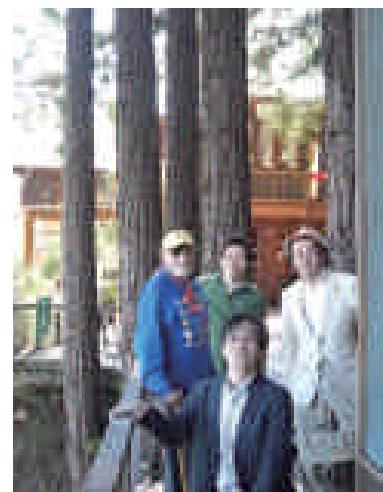
犀の人形と

では日本に大変不幸をもたらし、すまないこととした」と。

途中から話を横で聞いていた案内役のパロマが「キヨウジ、ローレンスがこんなこというのは初めてよ。私も今まで知らなかつたし、今日は特別の日だわ。キヨウジは日本に帰つたらこのことを知らせなければならぬ」と真剣なまなざしで訴える。

私は長年、環境問題やCSR（企業の社会的責任）について研究してきたが、日本では、何でもかんでも細分化して「環境問題やCSRを知識として学習しましょう」という姿勢が感じられ、もっと生活の中で総合的に解決すべきものではないだろうかと不満に思っていた。ESDの精神には総合的にサステナブルな（持続可能な）社会にしようという姿勢があり、それが研究チームに所属したゆえんにもなっている。

ローレンス・アンナ夫妻には人種も、人間と他の動植物の差別も、時空をも超越した存在感があった。藝術も自然も我々の生活の中に溶け込ませ、動植物も友として共生する確固たる生き方が伝わってきた。



今まで持っていた漠然とした疑問、すなわち「環境・CSRを知識や事象として細分化して学ぶ日本にありがちな姿勢」とは異なる「自然や

藝術と混然一体化して物静かに過ごす生活の中に実現している理想的な姿」をハルプリン夫妻に見ることができた。

2

ハワード・シェクター (Howard Schechter)

～美しいビーチで素朴な暮らしを深める～

(中野民夫)

今回のツアーの多くの部分をコーディネートしてくれたのは、アースハウスのパロマ・マガレット・パベルさんだったが、彼女はもともと私が1990年前後に休職・留学していたCIIS(カリフォルニア統合学大学院)のODT(組織開発・変革)学科の先生だった。グループでの参加や体験を大切にした学びの場であるワークショップや、そのような場を創り促すファシリテーションについて、多くを学んだのも彼女からだった。

今回は、当時ODT学科長で、サークルやトーキングスティックなど、とても丁寧で深い場をいかにして創るかについて教えてくれたハワード・シェクターも訪ねることができた。彼は、ずっとステインソン・ビーチというマリン郡の太平洋岸の瀟洒な街に住んでいる。日本で言うと葉山のようなイメージの街だ。かつて修士論文の指導をしてもらいに通った。大きな薪ストーブに薪をくべながら待っていてくれたり、奥の部屋に2つの座布(座禅用の丸い座布



団)と線香がさりげなく用意されており、心暖まる素敵なもので励ましてくれた恩師である。

今回、パロマ含む4人で海のすぐ近くの素朴な家を訪ね、さっそく初夏の太平洋のビーチを裸足になって歩いた。とても広々としている美しい砂浜だ。海鳥や散歩する人や犬を見ながら、相当の距離を歩く。夕方のやさしく心地よい光と風。

ハワードは、最近も組織コンサルタントの仕事をしているが、有名なエサレン研究所で、連れ合いのバーバラと一緒に「カップルの関係性」のワークショップも年に数回開いてきた。その



成果を最近、『親密なパートナー』という本にまとめている。

朝はまず瞑想し、山のトレールを走り、サウナに入って1日を始めるという。犬とビーチを日に2回散歩し、仕事は極力近くのクライアントの仕事に絞っているらしい。うーん、なんともシンプルで健康的な日々。しかも最近は、石の彫刻にはまっているという。エサレンでクラスに出たのがきっかけで、今や暇があれば、庭の一角の作業台で石を削っているらしい。2～3年で60くらい掘ったという。私も、「空飛ぶ象」のような魅力的な作品をひとついただいた。

20年前に留学した時も、すでに安定感のある深い存在感を醸し出していたが、ずっと太平洋を毎日眺めながらの健康的でシンプルな暮らしぶりで、ますます磨きがかかっていた。いつか屋久島でゆったりしたワークと一緒にできることを夢見ている。



～鴨長明の方丈記さながらに暮らす

ハワード・シェクター～（岡本享二）

中野民夫が20年前留学していた大学の恩師宅を訪ねた。湘南を思わせるマリン群の海辺の町 Stinson Beach の、それこそ台風が来れば海水を浴びそうなところでハワード&バーバラ・シェクター夫妻は、鴨長明の方丈記さながらの簡素で Spiritual な生活を営んでおられて、私は大いに共鳴することができた。

ジョアンナ・メイシー宅が住宅地、ハルプリン夫妻宅は自然の懷の中とすれば、今回訪ねたハワードさんの家は、庶民的を通り越して、ちょっとチープな感じの海辺の町だ。それもそのはず、この一帯は1960年代のヒッピーたちの住み家でもあったという。そんな町の一角に、我々一行は土曜日の昼過ぎ、砂地と土が入り混じった海辺独特の道に車を停めた。そこがハワードさんの苦屋だった。

主は芝生の庭のパイプ椅子で本を読みながら

待っていてくれた。庭で歓迎のハグを交わすと、数十メートル先の海辺に行った。全員靴を脱ぎ捨て、砂地を太陽に向かって歩き続けた。どこまで歩くんだろうと思い始めたころ、先頭を歩いていたパロマとハワードがUターンして帰路に就いた。カモメやペリカンの群れが飛び交う海辺を2時間近く黙って歩いていると、ここまで渡米調査で見聞したことが走馬灯のように浮かび上がり、やがて私自身の60年近い人生を振り返る格好の癒しの時間となっていました。

ハワードさんの方丈記さながらの家は、夫妻の寝室とダイニングキッチンがあるだけの、日本流にいえば大きめの1DKだ。庭にはあとから建てた書斎があったが、それとて3畳くらいのこじんまりしたものだ。簡素な家に上がり込んで、ナッツやビスケットをほお張りながらお互いの人生を語った。

ハワードさんには何冊かの著書がある。私は代表作の『Jupiter's Rings. Balance from the

Inside Out』を、中野民夫は最新作の『Intimate Relationship』を授かった。

こんな愛すべきハワードさんと、2つの不思議な交流体験もできた。

書斎に案内してもらったとき、彼の蔵書の中で、私はなぜか『I AM THAT』のタイトルの本が気になった。「I am thatっていったいどういう意味ですか?」。ハワードはにこっと笑顔になって「実にいい質問だ。ひとことでは説明できないが、私の人生そのものなんだよ。いい本だから君も読んでごらん」と言って次のようなことを話してくれた。

帰国後、諸々調べてみるとおよそ次のようなことが分かってきた。

「我々自身が他の人や動植物になっていたかもしれない。たとえば、物乞いをするホームレスに単に憐れみを感じるだけでなく、場合によつては自分自身がそうなっていたかもしれない。たとえば、暴力を振りかざす海賊がいたとして、社会から激しく非難され厳罰を受けたとしよう。非難し、罰則を与えることで解決できるのだろうかと考えること。なぜなら生まれた環境や生活環境によつては我々自身が海賊として生まれていたかもしれないからだ。我々生きとし生けるものはあらゆるものに成る可能性がある。だからこそ世界中の、どんな人に対しても、どんな動植物に対しても彼らを大切にし、敬う心が必要だ」というようなことである。詳しくは、「I AM THAT」のキーワードでインターネット検索をすると140万件ヒットするので参照していただきたい。400ページにわたるこの本もPDFで取れることも分かった。そして、この“I AM THAT”的思想こそ、私が今回の渡米調査で気付かされたことを一言で表す言葉そのものだと思った。

ハワードさんの出会い、そして書斎に立てかけてあつたたつた冊の本からこんな高遠な思想にふれることができ、驚きと感謝でいっぱいだ。

もう一つの忘がたい交流は實に些細なこと。夕飯時になつたので、奥さんのバーバラを自宅に残して近くのレストランに行くことになつた。案内役のパロマの車で、土地に詳しいハワードが運転して5人で出かけた。彼は車(トヨタ・エルシオ)の特徴を聞いてエンジンをかけスムースに発進、レストランでもお酒を一切飲まず、水を4杯飲みながら、我々が注文した魚、ポテト、ピザにもほとんど手を付けず、みんなの会話を楽しむ風情。決して強く自己主張するでもなく、時々自分の考えを挿む程度であった。レストランでの歓談を終え、再び彼の運転で帰宅。詩を歌つて10時になつてようやく我々は宿泊先のホテルへと向かった。

帰り際、お礼とともに正直な感想を述べた。「ハワードさん、あなたとは今日が初対面、長く話したこともない您的ことは何も知りませんでした。わずか半日過ごしただけで、ハワードさんの人となりがわかつたような気になりましたよ。アメリカ人には珍しいシンプルな住まい方、レストランでの我々に配慮した控えめで心温まる対応、車の運転で見せてくれたクレバーで同乗者に配慮したスムースな運転。それらがハワードさんのすべてを語っていました。“I AM THAT”は私が追い求めてきたことを一言で表しているように思うので、帰国後、勉強してみます。本当にありがとう」。

ハワードは黙つて私の体を強くハグしてくれたのでした。

バイバイ、ハワード&バーバラ！

3

ジョアンナ・メイシー (Joanna Macy)

～世界で「つなぎ直す仕事」を
促し続ける80歳～（中野民夫）

ジョアンナ・メイシーは、仏教研究者であり社会活動家である。仏教の縁起の法と一般システム理論の比較研究で博士号を取った。核の問題や環境問題などに対してユニークなアプローチで活動してきた。私は1990年前後の留学中に、湾岸戦争に対する彼女の姿勢に感銘を受け、当時は「絶望と再生のワーク」と呼ばれていた彼女のワークショップを体験し、多くのことを学んだ。仲間と『世界は恋人　世界はわたし』という著作を翻訳したり、日本にも招いてディープ・エコロジー（深いつながりあい）のワークショップを開いたりもした。

今春、多くの仕事を共にしてきたパートナーのフランが急逝し、しばらくは相当失意の中にあったようだ。ある時、夢で遠くの星からフランが出て来て「私は十分生きた。あなたの仕事を続けなさい」と語ったのを聞き、ずいぶん元気を取り戻したそうだ。

バークレーの自宅を皆で訪ねた。最初は二階の明るい外のテラスで、次第に風が冷たくなってきたので、キッチンのテーブルで話を聞いた。初めての岡本さんと新谷さんに、彼女が長年世界で実践してきたワークショップ、「つなぎ直す仕事 “The work that re-connects”」のエッセンスを語ってもらう。

私たちは今、経済成長を至上としてきた「産業成長社会」から、自然や人間同士の生命を大切にする「いのちを生かす社会」への大転回期にいる。一番目の農業革命、二番目の産業革命に次ぐ、第三の革命の時期。それは、エコロジカル革命、環境革命、サステナブル革命、何と言ってもいいが、大いなる転回の時期であることは間違いない。この時代に生まれてきたことを感謝したい。



「つなぎ直す仕事」ワークショップは、大きく四つのステージで構成される。

- (1) Gratitude = この世界のすばらしさ不思議に意識を向け、今ここに存在することを味わい、感謝することから始める。
- (2) Honor pain for the world = 世界で起きている問題に対して心が痛むのはとても健全なこと。そのことに敬意を持ち、思いやりの心を深める。
- (3) Seeing with new eyes = 世界を自分の外にある対象として眺める世界観から、自分が世界の一部である世界観へのシフトを促す。
- (4) Going forth = 思いやり（慈悲）と知恵（相互依存の洞察）の二つの翼を携え、それなりの個性と思いを活かして、前に進む

で行こう。

大転換期の具体的な行動として、3つの局面を大事にする。

- ①まずは、地球と生物たちへのダメージを遅くする活動。自然保護や戦争反対など、破壊や暴力を止める活動だ。
- ②2つ目には、社会の構造的な原因の分析と代替案の創造。問題の根源をシステム思考的に探り、新たなオルタナティブを提案し、実際に生きること。
- ③そして根底にあるのが、意識のシフト。これまでの分離した世界観など常識を疑い、相互に依存し関係し合っている動的な世界観への移行。

これらが行動する時に大切な視点だという。80歳になっても世界のあちこちから招かれて元気に出かけているジョアンナ。最近は、カナダでネイティブアメリカンの「走る」ことそのものが祈りであるという伝統に出会って感銘を受けた、などの話もしてくれた。

グローバル化が進む世界で起きる金融危機やインフルエンザなどの問題は、本当に世界が相互につながりあっていていることを痛感させられる。深いつながりあいの中に苦しみも希望も見据え、生命を活かす社会への大転換期を前向きに生きる彼女の思想と方法論は、1990年前後よりも今の方が、日本でも受け入れられる素地ができてきたと言える。日本でもっともっと研究され評価されてもいいだろう。



～環境中心の世界を願う

ジョアンナ・メイシー～（岡本享二）

米国調査団のミッション3人と案内役のパロマさんの4人で、瀟洒なご自宅二階のバルコニーで歓談。手入れの行き届いた庭と借景の緑がきれいだ。私が数十メートル先の大きなソテツのような木を指して「大きな木ですね。ここに住み始めたころは小さかったのですか？」と何げなくジョアンナに伺うと。「まあいい質問。実は1月に亡くなった主人があの木が好きでねえ、それでこの位置にバルコニーを作ったのだから。あの木が小さかったからって、そんなこと覚えてないわ。だって毎日見てるんだもの」との回答。

5月2日で80歳になったというジョアンナとの歓談内容は、40年以上の Social Justice（社会的正義）活動に裏打ちされていて、Deep Ecology（深い環境）活動のみならず、市民活動、人権、原子力問題から生態系に関する問題までを表層的にカバーするのではなく、仏教思想や精神性を説きながら全体的に解決しようとしていた。彼女がごく最近まとめた『The Three Dimensions of the Great Turning』の論述にあるように、彼女は経済社会から豊な自然環境、個人の精神生活、世界中の人々とのコミュニケーションを重視した変革を唱えていた。私の考えている「すべてを自然の尺度で考え、学び、構築し、お手本にする」に通じたものがあり、すっかり意気投合した。



会見の際、著書の『World as Lover, World as Self』を“For Kyoji Okamoto, with gladness in your life for the healing of our world! Joanna Macy”の直筆メッセージ入りでいただいて感激した。

しばらくバルコニーでの歓談が続き、風が強く寒くなってきたのでダイニングキッチンに移った。決して贅沢ではない、簡素で使いやすそうな住まいこそが環境活動家にふさわしいのだと確信した。帰り際に案内された寝室の鏡台に立てかけてあるチベットの風景画というのを見てびっくり。私が1995年に描いた絵と構



チベットの風景

図、配色がそっくりだったのだ。ジョアンナにその旨を伝えて、早速ホテルに戻ってからインターネット上に掲載されている私の絵を送った。彼女もびっくりしたらしく、早速返事が来た。

Dear Kyoji,

I love your paintings, especially the strong color and design.

Many thanks for sharing them with me!

Love, Joanna

皆さまもぜひ二つの絵を見比べてみてください。



岡本享二「馬のふるさと」(1995)

4

カール・アンソニー (Carl Anthony)

～黒人の苦労の歴史を超える、
環境と社会的公正に取り組む～（中野民夫）

アースハウスの仕事のパートナーに、カール・アンソニーがいる。

フィラデルフィアの貧しい層生まれのアフロアメリカン（黒人）。元々、建築を志す。しかし個々人が別々に建てる建築の限界を感じ、次第に都市計画やコミュニティづくりを模索した。カリフォルニアにも、建築の先生として来たが、個人の建物でなく、人々の、コミュニティのための建築で多くの人の関心を集めた。パークレーで、経済と環境と社会的公正の三つを大

事に、個々人の持ち物を超えて地域全体を含む新たなまちづくりを実践してきた。

活動的な環境NGOアースアイランド・インスティテュートのトップを、ディビッド・ブラウワーから継いで10年勤めた。その後、環境やコミュニティ支援では世界最大級のフォード財団（世界に14の拠点）から呼ばれ、ある部門の責任者として都市のコミュニティ作りと環境に特化した支援活動を展開している。

全米や世界で活動しているが、主なプロジェクトは、ラーニング・コミュニティ（学びあい学び続けるコミュニティ）をつくること。NGO経験も活かし、今も、特に研究者とNGO

などの活動家が一緒に協力して働くことで新しいアイデアが出てくるような機会を作っている。通常は両者の距離は大きいしズレがあるが、彼はその両者をつなぎコーディネートする。

アースハウスのパロマとも様々な形で協働している。また彼はアフリカの隠れた歴史を探り、大陸が今のように分かれる前に一つだった頃があり、3億年くらい前はアフリカとアメリカもひとつだったことに注目した。そして今、とてもスケールの大きな物語りの本を書いている。宇宙の誕生からの140億年の歴史をふまえて、私たちが何者かを問う。人間がやれ白人だ、黒人だと争ってきたのは、奴隸として連れてこられ搾取されてからの最後の500年くらいの話である、という達観した歴史観に立って、今後の世界を見透すものらしい。黒人として、過去様々な差別などつらい経験があったに違いないが、恨み言の世界は全く超え、大きな人類としての視点に立っている姿には感銘を受ける。

1970年の最初のアースデイも、その前の公民権運動が背景にあった。環境を、地球を守ろう、と言っても、黒人のコミュニティは貧困にあえぎ、多くが刑務所に入った。環境の浪費は、黒人や南米やアジア人など貧しい層の方がひどかった。怒りは、社会を壊しもするが、社会を変革する乗り物にもなり、我々はこの怒りを公民権を得る力にしてきた。

“justice (=正義)”と“social justice (=社会正義というより社会的公正というニュアンスか)”は違う。social justiceは、工業化された



社会ではCO₂が増えるが、これはシロクマにとってフェアだろうか？とか、一部の人々が富を独占するのはフェアだろうか？と考える視点だ。social justiceとは、ジェンダーや社会的階層や障害などで差別されず、特定の人やグループに所有されないことだ。この挑戦は、1970年代に波紋のように広がったという。

彼は最近、“environmental justice (=環境問題における社会的公正)”という造語を創り、アメリカではずいぶん広がってきてているようだった。環境問題の影響が最初に押し寄せるのは、世界中で余裕のない貧しい層など、社会的に弱い存在からであることが多い。また貧しい層はなかなか環境配慮の生活ができない。それではよくない。環境の問題も、社会的公正の問題も、共に解決していくかなければ解決はない、という強い思いが込められているのだろう。

カールの話は深く尽きない。我々には簡単には想像し得ない黒人というマイノリティの視点から、今やこの世界全体の持続可能な社会への



転換を地道に構想し活動してきている。大きなクマさんのような愛らしい巨体の大男で、歩行もぎこちない。「環境をやってる人間でタバコを吸ったり太っているのは疑問だ」と普段は手

厳しい岡本さんもカールの活動には賛辞を送りつつ「体重減らしましょうね」と念を押していた。体質もあるのだろうが、末永く健康でますます活躍してほしいと願う。

5

ハンター・ロビンス (L. Hunter Lovins)

～自然資本主義に雄牛のように立ち向かう

ハンター・ロビンス～（岡本享二）

素晴らしい出会いだった。Presidio School 経営者からこの大学院大学の説明を繰々聴いていて、そろそろ飽き始めたとき、カウボーイハットをかぶって、雄牛のように頑強な体躯で現れたのが“Natural Capitalism（自然資本主義）”の第一人者であり、30年以上にわたって“Sustainable Development（持続可能な開発）”を提唱してきたハンターさんだった。

彼女はNPOを組織する傍ら、一流大学で教鞭をとったり、市民団体や自治体・企業における助言を行ったりしてきたほか、いくつかの会社の立ち上げに携わっており、インスピレーションにとんだ講師かつ有能なコンサルタントとしてひっぱりだこの人である。

その話に引き込まれた私自身も、脇で「次の予定があるから質問はいい加減に切り上げて」とメモで要請するパロマを無視して話を続けた。そしてついにパロマと内輪げんかをして中野さんとパロマは次の予定に回り、私と新谷さんは残ってハンターさんと会話を続けることにした。何がそうなせたのか？

ハンターさんは「市民、コミュニティー、及び企業がともに同じ土俵で活動することが地球上で最も強力な問題解決力になる」と信じていて、実際に我々が直面している問題に対する実用的かつ実現可能な解決方法を生み出し、履行できるチームの設立に尽力してきた。

6年間にわたってカリフォルニア保護プロジェクト（Tree People）のアシスタントディ



レクターであった彼女は、カリフォルニアの弁護団の一員として革新的な都市森林計画および環境教育グループの設立に携わってきた。

また、David Brower氏の下でFriends of the Earthの政策アドバイザーを務めたほか、Dartmouth大学のHenry R. Luce客員教授に指名され、いくつかの大学においても教育に当たってきた。

1982年には50人規模の研究所であるロッキー・マウンテン研究所（RMI）を設立し、その年間予算7000万ドルのおよそ半数は計画的な事業によって獲得している。彼女はグローバ

ル・アカデミーに参加するために退く2002年まで、RMIの政策CEOを務めた。

さらにハンターさんは持続可能な開発に関する世界サミットに向けた欧米会議のための合衆国事前会議の北米代表者4人のうちの一人に選ばれた。

現在、彼女はグローバリゼーションに関する国際フォーラム委員会における米国代表委員の一人であり、2003年にはNatural Capitalismを設立し、世界規模で持続可能な開発という考え方を履行する方法として、非営利の自然資本主義という考え方を提唱している。

その実現のために持続可能な経営における公認MBAを初めて試みたPresidio World Collegeの設立に携わり、現在は同大学でビジネス学の教授を務めているというわけである。ハンターさんの飾らぬ性格と、私が信奉している「自然から謙虚に学ぶ」姿勢がそっくり同じだったのだ。レスター・ブラウンに学んだところ

が多い私だが、その出どころはハンターさんにはあったのだと思う。

話はCSRから環境全般、そして私の持論である“Fermentation Theory”“あらゆる開発は自然から謙虚に学ぶ姿勢が大切”で、すっかり意気投合。ハンターさんからしきりに「Kyoji show me your paper」と、英文での論文の提供を求められた。その時ほど、つくづく自説を英文にしてNatureやTimesなど著名な専門誌に論文を発表しておく必要性を痛感した。

予定の1時間が2時間半にわたり、2階に上がりつてサステナブルな研究成果事例36事例をパネルで見せていただき、写真撮影も許可してもらった。さらに当日行われた卒業パーティーにも飛び入り参加させていただき、ワインを片手に在校生とも会話を弾んだ。

今回は現地コーディナイターのパロマさんは迷惑をかけたが、この素晴らしい機会を得ることができ感謝に堪えない。

6

ボニー・ニクソン (Bonnie Nixon)

～サプライチェーンを追って世界中を駆け巡る
ボニー・ニクソン～（岡本享二）

hp社は私の勤めていたIBMとはコンペの関係にあり、2004年に共同で制定したEICCについても経緯や裏事情を知ってる者としてBonnieさんの話には大変興味があった。日航ホテルのロビーで伺った話は優等生的回答で注意深くあたりさわりのない説明に終始していたように感じられたが、晩餐会でワインが3杯目を過ぎたころから本音と彼女の真摯な生活態度があらわになり、親近感と本物の環境アクティビストの素顔を見ることができた。以下、主に晩餐会での忌憚のない会話をベースにBonnieさんの素晴らしい哲学に迫った。

Bonnieさんの環境への原点は、環境学を学んでいた大学生の時に、1979年のスリーマイ



ル島の原発事故が起り、その時に世論が賛成・反対の意見の対立に終始していた現状に対し「意見の対立だけでは何の解決にもならない。賛否の間に立って建設的なスタンスを目指すようになったことが原点である」と話してくれた。この立場は2008年に訪れたロンドンのFfF (Forum for the Future) の考え方と同じだ

など感心した。

EICC 制定に際しては各社別々に活動するよりも何社かのコア企業がまとまるこことによってグローバルに良いことを展開しようという側面がある。一方で IBM コーポレーションの担当者から聞いていた話として、事実はもっと複雑で見えない闇の世界が存在するというものであった。その辺を Bonnie に率直に尋ねると「その通り。実際のサプライチェーンをたどっていくと 8 階層も 9 階層もあって驚かされる。企業のオフィスでネクタイを締めた担当者がコントラクトを真顔でかわしても実際に最末端まで行ってみると予想だにしないことも起きている。しかし、たとえ Green Washing といわれようと、まず第一歩を踏みこむことが大切だ」

という真摯な姿勢に私も思わず賛同していた。

さらに彼女は年間 200 日以上を中国やインドを中心に海外の現場を訪ね歩いているという。その原動力はタフな体躯にもあるようだ。欧米人としては小柄な 160 センチ前半と思える体にサイクリングや水泳で鍛えた筋肉の付き具合は、腰に手をまわした時の感覚でただものではないことがわかった。ママチャリではない、本物のサイクリストの姿が垣間見えた。

現地コーディネータのパロマが「彼女に会うには 1 年前からの予約が必要だ。今回はわずか 2 週間でアポイントを取ったんだよ」というのは事実のようだ。まさにハードビジネスウーマンとの会見と晚餐会のチャンスに感謝あるのみだった。

7

ハイ・グエン (Hai Nguyen)

～数奇な運命に翻弄されるも意志ある

ハイ・グエン～（岡本享二）

今回の渡米視察旅行の後半のドライバーはベトナム出身のハイさん。60 歳をちょっと超えたハイヤー、小型バスのガイドを兼ねた運転手さんだ。彼の半生は歴史に翻弄され、まさに難民問題、社会問題、訴訟大国アメリカの現状を知るための生き証人だった。

向学心に燃えていた若いハイさんは来日して東海大学に留学。工学部で船舶の設計をマスターして日本の造船会社に設計師として入社した。そのころベトナムではポルポト政権の勃発により、帰国すると命の保証がないどころか、インテリ層は虐殺されていて、帰国は即、死を意味する状態だったそうだ。

家族も危険にさらされはじめ、やむなく家族をアメリカに亡命させるためにも、単身でアメリカにわたり、生活の場を自ら求めざるを得ない状況だったという。当時日本では難民の受け入れをしていなかったのでアメリカで職を探す



ことになった。

渡米後ほどなく船舶の設計の仕事を米軍内に見つけるが、ビザの提示が必須であったため、習得が本国の混乱でできないハイさんは結局、軍の仕事にはつけず、やむなくタクシードライバーになった。

それから 40 年余り、ドライバーが彼の一生の仕事になってしまった。その間に家族を呼び寄せ、同じベトナム人女性と結婚をして、長女と次女を授かる。幸せは短く、お子さんが小さいころ奥さんを白血病で亡くし、2 人の女の子

を男手ひとつで育てる。その間にはせっかく手に入れたマイホームを手放してまで訴訟に対応する日々が続く。

彼の住まいは亡くなった奥さんとその妹夫婦との2世帯住宅だった。ハイさんの奥さんが亡くなった後も同居して2人の子供と住んでいたが、妹夫婦の旦那さんがハイさんと妹（旦那の奥さん）の仲を邪推、訴訟になった。仕事が時間の自由になるハイさんは2人の子供と、義理の妹さんの体調がすぐれないため、義理の妹夫婦の女の子の面倒も一緒に見ていた。小学生だったので、当然のように自分の子供たちと一緒にお風呂に入ったりの世話をしていた。それを児童猥褻罪として義理の妹の旦那がハイさんを検察庁に訴えた。児童に対して厳しく罰するのがアメリカの法律。ハイさんにとっては自分の子供と同じように世話をしていただけで、実際にばかばかしい訴えにもかかわらず、陪審員制度で有罪になると禁固20年にもなる。やむなく優秀な弁護士を付けざるを得なくなり、自宅を処分して法廷闘争に明け暮れた。

晴れて無罪を獲得したものの、何の補償もなく、大事な自宅がなくなってしまい、また元の貧乏暮らしを続けた。幸い、2人の子供が大変優秀で、上の子がこのたび晴れて歯科医師として独り立ち。相当な年収が保証されるに至った。

次女も負けず劣らず、弁護士の卵になって将来が約束されるまでになった。

まさに自分自身を踏み台がわりにして、家族や子供のためにドライバーを淡々と続けた。日本語、英語、ベトナム語が堪能で、中国語も、韓国語もわかるというハイさんにはアジア諸国の企業からガイドの予約が殺到。生活には困らなかったが、タクシー会社勤めで、生活は苦しかった。

子供たちはハイさんの苦労をよく見ていて、勉学に励み、奨学金をフルに活用して一流大学の卒業にこぎつけている。アメリカの大学の素晴らしさは公平な審査により国籍に関係なく優秀な学生には返済金なしで全額が供与されることである。

長女が学生時代に登山して滑落、頭がい骨を骨折する重傷を負った時は事故から10分後にはヘリコプターで病院のICU室に運ばれていたという。すべては大学の保険で支払われ、通常ヘリコプターでの搬送費にかかる200万円も保険で支払われたという。

ハイさんはアメリカの訴訟社会には辟易していたが、フェアーナ国だと大変感謝していた。それにしても、我々は、CSRや環境の調査に来ていて、身近なドライバーであるハイさんから人権や社会問題のお話を直接に聞けたことは大変ラッキーであった。